

幼少期における「死との出会い」のもつ意味

佛教大学教育学修士修了 田 原 開 起

はじめに

この小論は、修士論文の中の、地域事例研究⁽¹⁾を抽出し、聞き取り調査やアンケートをもとに「死との出会い」の意味に迫ろうとした。

第1章 明治末期から大正期の子どもたちの「死との出会い」

今日では「死が家からどんどん遠ざかり、死に対する意識が希薄化した」⁽²⁾ことを新村拓は指摘している。しかし、かつては当たり前であったと言われる自宅死の内実「死との出会い」についての具体像を、氏は述べていない。また多くの論者⁽³⁾も、今日子どもたちに死との出会いが少なくなったことや、死との出会いの大切さを論じている。しかし、その重要性を指摘するためにも、さらには病院死が「死のイベント化」「死の儀式化」「死の産業化」につながり、死に対する意識が希薄化したことを指摘するためにも、その前提として、日本社会に古くから長い間続いた自宅死の内実がどのような具体的事実を伴っていたのかをつかまねばならない。具体的な事例を示した上で、自宅での死がどのようなにいのちの感動を与えたのかを明らかにしなければ、死が儀礼化して「無感動」になったと言ってみても抽象論に終わる。そこにアプローチするためには「死との出会い」を、具体的に掘り起こすことが求められる。

また、死が日常の中にあった頃は何が「デス・

エデュケーション」⁽⁴⁾の役割をしていたのかの問に対して、「特に仏教僧の日常での法話・説法あるいは宗教的な法話」が、問わず語らずにデス・エデュケーションであったと田宮仁は答えている。

しかしながら、谷川守正が「何も人に教えるという形よりも、自らの体験を通じて、自らそこに生きることによって、自らそこに何かを求め、そして、そこから何かを見だし、そして、それをまさに自己教育として、自ら今後ものにしていく」⁽⁵⁾という自らの体験的な自己教育の視点が重要であると指摘している。この視点に注目すると、子どもたちが死に生々しく出会うという体験に根ざした自己教育の土壌が地域社会にあったからこそ、それを土壌にして仏教僧の日常での法話・説法が「デス・エデュケーション」として積み重なっていったものと筆者は想定し、その事実を抽出したい。

以上の二つの観点から、明治末期から大正期の子どもたちがどのように、他者の「死に逝く姿」に出会ったのか、その具体的な事実を高齢者の聞き取り調査から拾いあげて整理してみたい。

この調査は2001年10月から2004年3月にかけて主に筆者の居住区（広島県中央部一広島県賀茂郡一現三原市一大和町）を中心にし、機会をとらえて可能な限り広島県内に調査の輪を広げていったものである。中には県外もある。原則として明治・大正期生まれの高齢者（70歳代か

ら90歳代)を対象者とした。調査件数は現時点では58人に留まったが、それぞれ個別的に聞き取り調査を行った。

この調査の出発点は、広島市安佐北区可部町姫瀬地区に保存されていた、大正時代における葬儀後の1枚の集合記念写真である。この写真のもつ意味は大きい。被写体60名の内23名が、小学校程度の学童、ないしは学齢期に達していない子どもたちである。しかも、そのうち親族として正装している子どもはわずかであり、多くの子どもは地域の子ともである。このことの意味は、日常生活の中で、ある日葬儀という非日常に出くわし、子どもたちはものめずらしくて、葬儀の場に集まっていたということである。死が日常生活の一部として、切り離されることなく、子どもの日常にも組み込まれている。

この1枚の写真を出発点にして、可部町以外の他の地域でも、昔、子どもたちは葬儀の場面に出くわしていたのかを、県内外各地で聞き取り調査を行なった。調査方法は、調査として構えたり改まったりするのではなく、日常生活の中で自然に出会った普段着の年配者から、できるだけ自然な会話の流れの中で、相手の思いのままを聞き取ることを主にした。可能な限り時間をかけて、相手の語りに任せ流れに乗って、聞き取り調査を進めた。

あるときは田んぼの畦で、あるいは軒先で日向ぼっこをしながら満ち足りて生活している年寄に声をかけて、また時には旅の道端での四方山話の続きとして、気楽な会話の中で聞き取っていった。時には病院の待合室で出会い、ボランティアで自宅まで送る間に話の核心に触れることができることもあった。ドライブの途中道を尋ねたことがきっかけになって、意外な話に出会うことも何回かあった。また高齢者の会合の後で聞き取りをしたこともあった。

話の切り出し方も雰囲気大切に、話の強引な方向づけはせずに話の成り行きに任せ、相

手の語りをつとめて大事にした。聞き取りをする側の都合で、やつぎ早に発問を押し付けることなどは極力避けた。

調査の結果、当時の子どもたちは、人の「死に逝く姿」に生々しく出会っているということが見えてきた。その出会いの中から、当時の子どもたちは、いのちの大切さを体得したものである。それは今日の子ともたちが出会う死の儀式や、死の情報とは異質のものであった。

第1節 地域の葬儀や野辺送りの行列へ参加した体験と火葬場での体験

1 子どもの頃に「人の死」に出会ったか

聞き取り調査対象58人の中で近隣の葬儀や野辺送りに行った経験が、ほとんどないことをはっきり表明した者が7人いる。しかし、話は親兄弟・友達から聞いている。当時ほとんどの子どもたちは、日常の中で地域の人の死に出会っていたものと受けとめる。総じて子どもたちは「人の死」に出会うことが日常のことであった。一体その中で子どもたちは、死にまつわる何に出会ったのか、どういうきっかけがあって出会ったのか、そして、子どもたちにとって死は何を意味していたのか、などを具体的に明らかにしたい。

2 子どもの頃に「人の死」に関する何に出会ったか

(1)「死に目」に出会った体験や見聞

いわゆる「死に目」に関して、聞き取り調査の中から事例をあげる。

「祖母は死に際に自分の息子に『Kよ抱いてくれりゃあいいのにー』と頼み、息子の腕の中で眠るように息を引き取った」(以下聞き取り内容の要点を「」内に示す)という事例をはじめ、「死に目」に会った衝撃よりも、死の前後の衝撃の方を大きく記憶しているという事例もある。例えば「祖母の棺桶から大量の血が流れ出

ていた」衝撃が、「死に目」に会った瞬間よりも強かったという事例のように、「死に目」という瞬間だけでなく、総じて死の前から死後までの「死に逝く」過程全体を死として受けとめているように思える。彼らは生活の一連の流れとして「死に目」をごく自然に受けとめている。昔子どもたちが会ったのは、死を部分的に切り取った、いわゆる「儀式」だけに会おうような死との出会い方ではない。

「ふり返ってみると昭和50年ごろからは病院で死ぬ者が身内でも増えてきた。それまではほとんど家で死んでいた。ほとんどの人の死に目に会ってきた。あの頃から何かにつけて変わってきた」と言う、時代の節目に注目させる事例もある。さらに「たとえ死に目に会っても今の子どもたちは、大人を含めて臨終の時、いっせいに機器の方を見ている」という。すなわち、まさに今日では「死に目」に会うのではなく室内に設置された脳波・心電図などのモニターを通して「死の情報」に出会っていることを示す。

(2) 儀礼に出会った体験や見聞

加藤秀俊は死の儀礼⁽⁶⁾を次のように分けている。第1が死後すぐに行う死んだ人の「魂^{たまよば}呼び」と「末期の水」である。第2が「枕飯」という儀礼で、第3が「お通夜」、第4に「湯灌」という儀礼である。第5に「葬式」で、第6には「出棺」であると、まとめている。

聞き取り調査の中では加藤の第1・第2・第3に関する話には、ほとんど出くわさない。「お通夜」はもとより「枕飯」の儀礼は今日でも行なわれており、しばしば見かけるが、高齢者の話題にはなぜかのぼらない。上記の儀礼では第4の「湯灌」が多く語られる。その他の儀礼では、儀礼に関する記憶よりも、それにまつわる事柄に関心が集中しているように思える。例えば「葬式」・「出棺」そのものは話題にならないが、その前後での「角寄せ^{すみよ}せ」や「棺造り」や「納棺」の見聞や体験などに多様な経験が集中して

いる。さらに第6の「出棺」に関しては、その後の「野辺送り」の体験が多く語られている。いずれにしても、第1から第6までの死の儀礼は、死の過程を自覚的にとらえさせる節目であった。

① 湯かんの体験

儀礼に関することの中で多くの者が記憶しているのが湯かんである。聞き取り調査を総合すると、湯かんの前に家族は大急ぎで、白のサラシ（晒し布）で死に装束を縫った。その後納戸の部屋の畳を上げて竹製の床の上で湯かんを行なうことが、古くからの慣わしとして伝わっている。竹製の床の上に筵を敷いてその上で湯かんをしていた地域もある。文字通り盥に湯を張って、有縁の者が左縄を胸い左襟にかけて、血縁の濃い者から湯かんをした。湯かんの前に最後の別れとしての杯を交わした。しかし、家で湯かんをすることも次第になくなってしまったと高齢者自身も嘆いている。

② 「角寄せ」の見聞

調査から、この地域では昭和12年から13年頃までは縦棺といって座位で納棺する方法をとっていた。そのために亡くなったら早々に遺体を座位にして膝を抱え込むような姿勢にして紐でくくったり、布団を巻きつけたりして部屋の隅に寄せていた。そのことを「角寄せ」とこの地方では言う。

つまり、この座位の姿は生きた姿にも見え、死者でもあるので子どもたちの心の中には「生と死」が入り混じっていた。親しい人が「角寄せ」された、その姿の中に死の過程を見ていたものと思える。死は生きていた日常の続きのように子どもたちの心の中に留まっている。

③ 「棺造り」や「納棺」の体験や見聞

納棺や棺造りに関する調査事例はかなりある。葬式を出した家が、次の葬式のための棺桶を生木で作って用意しておいた。これを「作り置き」と呼んでいた。しばらく葬式がないと「作

り置き」した棺桶の木が枯れて燃え易くなり、焼く時に棺桶だけが早く燃えて遺体が焼け残ることもあった。ところが「作り置き」はあっても結核患者が出た場合は、伝染病であることを気づかってか、講中にも言わず自分の家で密かに作った。棺桶を作る音が結核をわずらっている青年の耳に届き、「自分の棺桶を作っていることを悟った」ことを聞き取り調査でつかんだ。

④ 葬儀や野辺送りの体験や見聞

地域ごとに焼場があるように、野辺送り場も地域ごとにあった。そこまで棺を担いで行く。子どももシカバナや蓮の花などを1本ずつ持たせてもらい、行列の一員としての役割に誇りをもった。所によっては菊餅や菓子を貰って食べていた。野辺送りの風景の中に子どもの姿が一体化していた。

このように子どもたちにも役割をもたせ、子どもに誇りと存在感を植え付けていたのである。まさにインフォーマルな教育の場であった。死の場面に臨むことを通して子どもたちにも地域社会の一員としての自覚が育ち、大人などとの位置関係や距離のとり方を学んでいった。暗黙のうちにこれらの体験が、子どもを育てていた。

⑤ 焼き場や骨拾いの体験や見聞

(『副論Ⅰ』p59～61参照)

このことに関して、聞き取り調査の主な事例を取り上げてみると次のようである。「荼毘に付すやり方について若い頃から見聞きしている。棺の焼き方が難しい。掘り込んだくぼみの中に薪を先ず縦に並べる。その次に十字を組むように横に並べる。穴は縦1.5m横1mくらいあり、深さはおおよそ0.5mくらいある。それに目いっぱい薪を敷きつめる。その上に藁を載せ棺桶を載せる。棺桶は、はぶせる。(内臓が焼け易いように、内臓を下向きに伏せる) そのまわりに枝木を四方から寄せかける。さらに燃え着き易いように周りへ藁を立てかける。その上を濡れ簀で密閉する。炎が外へ燃え出たら、薪と棺桶

だけが燃えて遺体は焼けずにそのまま残ってしまう。そうならないために濡れ簀で炎を外に出さないようにして、中を蒸し焼きの状態にする」、「焼場の当番は3～4人で務める。うまく火がついて焼け始めると、当番はしばらくお酒(普通1.8ℓ)を頂いて様子を見る。大丈夫だと思ったら、当家に帰って行った。すでに暗くなっている。当家では、まだかまだかと焼き番が帰るのを待っていて、焼き番が帰ると仕上げの膳になる」、「途中で風の向きが変わったり、きつい風が吹いたりすると、下側だけが焼けて棺桶が丸いのでひっくり返って焼け残ったりして、次の日に大慌てをすることもあった」

以上のように焼き場に関する話は、生々しい現実として多くの人々の心に残っている。焼き場当番は表には出ないが重要な役割である。患部がどうしてもうまく焼けない。遺体によって個々に患部の違いがあり、また当日の気象条件によっても焼け具合は異なり、薪や棺桶の木の乾燥具合によっても焼け方が異なる。諸々の条件によって焼け具合は個別的であり、今日の斎場のように骨が砕けボロボロになるまで、焼いてしまうやり方ではない。患部が焼け残ってもととだと納得しなければならない当時に、それでも朝までに見事にお骨にして遺族に届けねばならないという、講中の役割は大変なものであった。当時の人々は、ちゃんと遺骨にして届けることを当たり前のこととしてやってきた。近代文明の中で合理的な焼き方を知った、言い換えれば横着を知った、現代の我々は、つい一昔前まで先人がやってきたことを、やりきることができであろうか。とてもその知恵は受け継がれていない。学ぶべきは、この前まで受け継がれていた先人の知恵である。単なる知識ではなく、生きる力である。しかもこれら葬儀にかかわる一連の取り組みを目のあたりにする中で、子どもや若者は、いのちの尊厳を日常の中で自覚していったのであろう。

上記に示した一つ一つの死の儀礼は、とりもなおさず人が徐々に生から死へと踏み込んでいく過程を自覚的にとらえさせる節目なのである。子どもたちは、上記のように「死に目」「^{すみよ}角寄せ」「湯かん」など、人の死の節目節目に出会ったことが広義の通過儀礼となった。これらの体験が暗黙のうちに子どもの成長を支えていたと思える。

3 子どもの頃に「人の死」に出会った動機は何か

(1) 葬式や野辺送りの場面に出かけた動機

次に調査事例から、子どもたちが「人の死」に出会った動機を探ってみる。

一つには、明治・大正期の子どもたちにとっての日常は、平板であった。そうした中で、葬式は普段と違う行事であり、ものめずらしさも手伝ってそこに集まった。

そこへ行けば普段食べている麦飯とは違って、米の飯のおこげむすびが食べられる。地域によっては塩と砂糖までまぶして子どもにふるまわれた。このことは、聞き取り調査によると広島県内に広く共通している。

「子どもたちが学校から帰るまでむすびを入れ子に入れて待っていてくれた」とあるように、大人の温もりが子どもに伝わってくる。こげむすびのほかには野辺送りの行列のあとで、菊餅や菊菓子を配っていた地域もある。

いってみれば葬式は子どもにとっても、黒のハレの日であったのでそこに集まっていた。

二つには、一般的に焼場までは急な坂道であったので大人は、割り木を背負った背中を子どもに押させたり、花を持たせたりした。つまり、大人たちは子どもにも意図的に役割を与えていた。花を持たせてもらうとなんだか役割を務めているような気分になり、嬉しくて誇らしかったと語っている。

これらに見るように、大人が子どもに何らか

の役割と居場所を与え、子どもにも地域社会の一員としての存在感と自覚をもたせていた。「葬式の間はそのあたりで時間を過し」とあるように子どもたちは葬式そのものに参列することを主たる目的にして集まっていたのではない。どこまでも地域や自然の中でケの時もハレの時も大人と共に「居る」という、生活の一部であった。

(2) 聴聞や法事の場面に出かけた動機

調査事例によると、祖父母や親たちは、子どもたちを大人と同じように一緒に聴聞に臨ませた。それは、大人が教育を広義にとらえていたからであろう。子どもたちは、お寺参りとか家の法事や地域の報恩講などの行事には、学校を休んだり、早引きをして聴聞の場に当然のこととして臨んでいた。このようにして子どもたちは、人の死に関するさまざまな場面に臨んでいた。

親たちは学校教育と地域・家庭の教育を、教育の両側面として共に大切にしていた。子ども自身もゆったりとした日常を重ねていたから、ゆとりとものめずらしさの中で抵抗なく聴聞の場に臨んでいたのであろう。このように、地域や家庭の日常生活の中でも子どもたちの成長を図っていた。また人知を越えた、見えないものへの畏敬の念や、生かされて生きている現実を親たちが日常の中で学ばせようとしていた。

次に子どもたちが出会った「人の死」は何を意味していたのかについて述べてみる。

4 「人の死」は子どもにとって何であったか

それぞれの事例から、葬式がその地域に住む人々の日常に繋がっていることが先ずうかがえる。焼き場で人を「焼き始めると空に人を焼く煙が立ち昇る。その煙がどこへ行くかが、子どもたちの関心事であった」この風景は、血縁のある者をはじめとする有縁の者以外の人々の日常生活にも割り込んでくる。その地域の人々に

とって、黄色い煙は不気味であった。その煙が来る方角が次に死者が出る方向だと、生きている人々の日常に引き寄せて受けとめていた。別の聞き取り調査では、いつも遊んでいる「道の修理のための穴が崩れ、二人の人が生き埋めになった」その場面へ、馬に乗ったお医者さんが来て、道路端で検死した。それは平穏な日々、死が割りこんでいることを意味している。

「石工のSさんが山で死んだ。遺体を運んで帰る大八車について歩いた。ある時は、子どもが川に転落して流されたので、下流まで大人と一緒に探しに行った。また、子どもの頃に親戚の近くの造り酒屋の葬式があった。その家は土葬だったので、墓所に大きな穴が掘ってあった。深い穴だった。棺を穴に納める頃には雪がしきりに降った」などどれをとっても全て「人の死」が、そこに生活する人々の日常生活と密接につながっていた。

さらに「一日一日祖母は弱っていき、徐々に死が近づいた感じがしていた」などはその背景にゆっくりと流れていく日常がすけて見える。

これらの聞き取りから言えることは、昔「人の死」は地域共同体の日常生活の一部であり、生活の延長線上のことであったということである。つまり明治・大正期の子どもたちが出会った「人の死」は日常の続きであったというべきであろう。

5 子どもの頃に会った「人の死」の中で見えてきたものは何であったか

事例を通して見えるものは、一口でいえば人の死の生々しさである。

その頃の子どもたちに見えてきた「人の死」は、それぞれにリアルで個性を帯び具象的であった。個別にそれまでの日常を引きずっていた。

「父が死ぬる10日ぐらい前、父の死を覚悟した兄は棺桶を用意していた。結核だから棺桶の

内側に目張りをするのを兄は私に手伝わせた。結核だから地域に気を使っていたのだと思う。棺桶の用意をしている事は誰にも言うなと兄は口止めした。棺桶は蔵の中にしまった」父や兄を思うとせつなく不安であった少女時代を聞き取った。さらに無理やり棺桶に遺体を押し込めた場面など、幼少時代に見てきた体験がさまざまに語られている。

葬式を出す时必须薪が1～2坪（1尺5寸の長さの薪を積み重ねた側面の面積）は必要になる。ゆとりのある家では、日常用とは別に用意していた。しかし、日々の生活に追われてその余裕のない家では、葬式を出さねばならなくなってから、急いで薪を用意しなければならなかった。お母さんがこっそり裏山へ薪を作りに行っていると、「お母さんはわしの葬式の割り木を作りに行っているんじゃないろー」とお父さんが気づいて言ったという。これらはやがて死を迎えなければならない、やりきれない現実として迫ってくる。同時にお互いを思いやり支えあう家族の暖かさがひしひしと伝わってくる。

愛する家族との別れを目の前にして、いのちが徐々に消えていく姿を子どもたちは見ていた。それだけに死に逝く者に精一杯の誠意と愛情を示していた。

「痛を患っていたおばあちゃんは、死んだ次の日の朝に多量の出血を量に残していった。そんなことになってはいけなと、あらかじめ棺桶の底には、米糠を入れて万一の場合に備えていたし、出血を予測して念入りに身体中の穴に脱脂綿を入れて処置をしていたにもかかわらずそうなった事を母は残念がっていた」それをかいがいしく処置する母を見ていた。これらは、死を家族の日常生活のすぐ隣にあるものとしてとらえている。いわば「生」の一部としての「死」といえる。

内臓や頭が焼け残った話は数々ある。「胃をわずらっていたので胃の部分だけが焼け残って

いた。親類の者で焼いた」、「焼け残った内臓を鉋で引きちぎって細かくしてもう一度焼いた」、「風が強かったために、頭部だけが異常に焼けてしまい、棺桶からのぞいていた頭の皮が、小芋の皮をむくようにツルツとはげて頭蓋骨が見えた」など多くのことを子どもの頃に聞いている。もっとはなはだしい場合は焼き場で焼き始めると、抱えるようにしていた遺体の、膝の筋肉の収縮に異変が起こり足を伸ばすことがある。その時に棺桶を蹴って棺桶から足がはみ出ることもあり、まるで生きているようだった。これら個別的で具体的な死の姿は、今日とは全く違う死の臨場感をともなっていた。

子どもたちにとって、当時の死にはそれぞれが背負っていた個人史が見える。それぞれに生きてきた、愛する家族や親しい近所の人と、最後まで直接に向き合った後に、老いや病のために死に逝く、その姿との出会いであった。「人の死」の中で見えてきたものは死の生々しい姿であった。

人の一生の終わりや儀式は、今日のように医学や商業ベースでコントロールされたものではなかった。それぞれの死に個々のドラマがあり、それぞれに子どものいのちを育む「死の教育」があった。

6 「人の死」の中で学んだものは何であったか

「弟がたんぼつ（湧き水の出る小さな水溜り）にはまり気づいたら死んでいた。その時、お巡りさんに『あんたがしっかり守りをしようらんけーよ』とひどく怒られたのがいまだに忘れられない。今でも、その弟の墓に参ると『すまんことをしたのー』と手を合わせ弟の分まで生きねばならんと頑張っている」にみるように、人の死を無駄にせず、相手のいのちを、自分のいのちに取り込んで生きようとする姿が見られた。そうした心に残る死の体験が根底にあって、H.Hさんは、小さい頃からお寺参りを欠かさ

なかった。その後何度も逆縁に出会いながら、現在も元気でお寺参りを続けている。こうした幾重にも重なる死との出会いのために、ますます聴聞の場に自分を置くようになったとH.Hさんは言っている。死と出会うという自らの体験を通して、仏教僧の説教を身にしみて味わうことができると言うのである。また聴聞を通して、人の死をいとおしく思い、自分のいのちをありがたく思っていると、今日も老人車（手押し車）で畑仕事に出かけている。

上記のH.Hさんの例は、肉親の死が日常の中にあり、目の前で死を見届けた。しかも若年者の死にも数々出会った。「自らの体験を通じて、自らそこに生きることによって、自らそこに何かを求め、そして、そこから何かを見だし、そして、それをまさに自己教育として、自らのものにしてい」(前出)と谷川守正の言う、自己教育の体験的事例であり、それが土壌にあったからこそ、田宮仁がいう仏教僧の宗教的な法話が、デス・エデュケーションとつながっていったものと考ええる。

つまり、自ら身近な者の死に眼前で出会う体験的な学び（実学的な学び）が暗黙の土壌としてあったからこそ、仏教僧の法話（いわば座学的な学び）が、デス・エデュケーションとつながっていたものと考ええる。体験が基底にあってのことである。

人の死の中で学んだものは、人の死に学んで生きることであった。

第2節 地域で葬儀などの広義の通過儀礼に出会うことの人間形成上の意味

聞き取り調査によると、当時の親たちは、ストレートに「いのちの教育」などと大上段に構えた教育はしていなかったように思える。しかし、葬儀など機会あるごとに暗黙の教育、あるいは暗示的な教育をしていた。次のような調査事例がある。

「父の入院費用のために山を売った」、「兄さんの子どもは8人ぐらいいたが、最後から2人目は私がとりあげた。その時私は尋常高等小学校の高等科2年生（14歳）だった。隣のおばあさんが年をとったので、もう子どもを取り上げる自信がなくなったということで、兄さんが私に『お前が取り上げてくれ』と言いなさった。私はどうしていいかわからなかったが恐る恐る姉さんのそばでお産を見ていた。生まれてきたので臍の緒を切った。どの辺で切っていいのかわからなかったが、姉さんに聞いて切った。姉さんの側（母体の側）を糸で結んで、姉さんの足に巻きつけた。14歳そこらで、お産の取り上げをしたが、これくらい心配したことはなかった」とS.Oさんは語る。S.Oさんは5歳で母と死別し、10歳で父は結核にかかり、1年たったころ亡くなった。家は極貧のどん底にあった。父の死を覚悟した兄が地域に気づかれないように棺桶を作った。S.Oさんは棺桶の目張りを手伝った。誰にも言うなと兄に口止めされた。わずか10歳の時のことであった。

その後は30歳の兄が大黒柱となって、5人の兄弟はみな兄夫婦に面倒をみてもらった。長い人生でたくさんの生き死に出会った。そう語るS.Oさんの顔には刻まれたしわと輝く眼差しがあった。

しかし、コメントはない。感じ取れることは、「いのちの誕生」に出会い、人と人との係わりを容赦なく断ち切っていく死に直面することで、子どもたちは、自分のいのちを精一杯生ききることを、胸に刻み込んでいたものとうけとめる。そこには理屈で教えようという雰囲気はない。

上記のような聞き取り調査を通して、受けとめられることは、今日の教育は体験や経験から生み出された文化の上澄みをすくって、言葉で教えることに主力を注いでいるが、かつての「いのちの教育」は言葉が主ではなかった。「父

の入院費用のために山を売った」という、この事例が暗黙の「いのちの教育」を最も象徴している。

14歳で「産婆」役を兄から頼まれて、臍の緒を切り臍の緒の母体側を太ももに括りつけた彼女にとってこれ以上の「いのちの教育」はない。今日ではこうした体験そのものは、時代の風潮として不可能である。

しかし、これらの事例の意味するところは、文化の上澄みだけを合理的に教え込む教育への警鐘である。上澄みの下にとどまっている沈殿物としての澱の存在にも光を当てる重要性に気づかせてくれる。今日総合学習とか体験学習といわれているものは、ひと昔前までの日本社会の日常生活の中にその原型がある。上澄みにはそれを醸成する過程があり、上澄みの下には必ず澱がある。物事は両極として存在しているが、今日では上澄みの反対の極にある澱を不要なものとして、視界から消してしまった。醸すことの重要性もないがしろにされている。現在の教育に求めるべきことは、上澄みだけの吸収ではなく、澱にも目を向け、ゆっくりと醸成する姿勢である。上澄みと澱の両側面を体験することの重要性を感じる。

明治・大正期の子どもたちは、身の回りの人々の死と日常的に向かい合い「死に逝く姿」の衝撃を通して、自分が生きる糧にしていた。逆に今日の子どもたちは、他者の死を自己の中に取り込んで、人生を考える糧にすることが難しい状況に置かれている。今日の子どもたちは相手の気持ちを理解することが苦手であるが、その根源は、かつての子どものように、悲しみや苦しみや痛みを共有する体験が少なく、自分を相手の位置に置いて、物事を考える機会に出会っていないことにも大きく関係すると考える。端的に言えば以前のような、地域の教育的土壌が衰えた事によるものではなからうか。

第2章 現在の子どもは「人の死」という通過儀礼に直面しているか

第1節 その現状

今日私たちは、人の死に出会うことの意味をないがしろにしてしまったと言われるが、今日子どもたちは本当に死に出会っていないのか、出会っていないとすればそれはなぜかについて考察してみたい。逆に、出会っているとすれば、死の何に出会っているのか、どのように出会っているのか、いずれにしても、その実態を明らかにしなければならないと考える。

それらの課題に迫るために、小中学生と保護者にアンケート調査を試みた。そのデータをもとに考察してみたい。このアンケート調査は2003年11月から2004年2月にかけて行った。幼少期の子どもたちが、身近な人の死にさえ出会いにくくなっているといわれる。

実態はどうなっているのかについて、一つの地域研究として、広島県内の新興住宅地を中心とした都市部と典型的な農村部から小中学生・保護者424人を抽出し、両者を比較しながら、少年たちの「他者の死」との出会いを検証した。

1 死に出会った体験に関するアンケート調査結果（中学生）

(1) 調査結果を見ると「家族や親戚の人の死に出会った体験」は都市部の中学生66.1%、郡部の生徒は75.2%で7割前後の生徒が「死に出会った体験」をもっている。予想以上に多くの生徒が体験していると言える。

死に出会った者の中で都市部の生徒の63.6%、農村部の生徒の65.2%が遺体と対面した経験をもっている。これも予想以上に多い。

(2) 次に、調査項目の中で目立って低いパーセンテージを示しているものがある。

その一つが「死に目に会った体験」である。都市部5.9%農村部6.7%である。病院死が多くなり、死そのものが人の目に届かなくなり、死

が日常から切り離されていることを、この数は検証している。続いて、目立ってパーセンテージの低い項目の二つめが「湯かん」の体験である。都市部の生徒は3.4% 農村部の生徒も2.9%にすぎない。病院死が多くなり、病院での処置が「湯かん」に代わるものと考えられるのであろうか、人の死に直面する「湯かん」という通過儀礼は現在では次第に省略され、明治・大正期の子どもの体験とは全く対照的である。

パーセンテージの低い項目の三つめが、自宅での死である。自宅死は農村部では回答者の19.2%、都市部では26.4%で、今日の時勢を反映している。

(3) 次に、遺骨を拾った経験者は都市部で41.5%、農村部では約53.3%である。体験者はかなり多いが、骨拾いの場面での感慨は語られていない。葬儀が商業ベースに巻き込まれ、流れ作業の儀式に組み込まれたせいでもあろう。現に子どもの頃から、自分の故郷の農村部で何度も葬儀を体験した後、大都市の葬儀に参列した青年の聞き取り調査がある。彼は「大都市の葬儀が簡略でいとも儀礼的である」ことを述懐している⁽⁷⁾。

(4) 「家族・親族の葬式に出た体験」は都市部で71.2%、農村部では72.4%であり7割以上の生徒が葬式の体験をしている。また都市部で34.7%、農村部で37.1%の者が「近所の人や親しい人のお別れに行った体験」をもっている。3人に1人は肉親以外の他者の死とかかわっている。

一般的に、死が日常から隔離され、その結果子どもたちから死が遠ざかったと言われるし、筆者もそのように想定していた。ところが、儀式に参列するという意味ではかなり多くの子どもたちが死に出会う経験をしている。この調査に基づくと今日一般的に、子どもたちが「死に出会う体験」が少なくなったという場合の「死の体験」とは何かを改めて、内容的に精査しな

ければならない。今日の子どもたちのかなりの者が「死の情報」や「死の儀式」には出会っている。その限りにおいて、現在の子どもたちは「死との出会い」が少ないとは言えない。問題は今日の子どもたちにとって、人が「死に逝く」生々しい姿との出会いが決定的に欠けているということである。

2 小学生の現状

「自宅での死」の割合、「湯かんの体験」「死に目に会う体験」の割合のそれぞれをみると、その傾向は中学生の実態と類似しているし、保護者のアンケートも同様である。

自宅での死や、死に目に会う体験、死者の湯かんをする体験など生と死の生々しい体験の場が削ぎ落とされ、死が日常から遠ざかっていることを小学生のアンケートからも読みとれる。

総じて、前述した明治・大正期の子どもの体験とは対照的である。

第2節 大人は「人の死」に子どもを対面させているか

1 「人の死」との出会いにたいする大人の姿勢

アンケート調査結果によると、7割から8割の保護者が「親戚の葬式や見舞いに連れて行く」姿勢を示している。しかもその理由として、死をみつめ、いのちを大切にしてほしいという願いを込めている。大多数の親たちが個々には「死との出会い」を大切に考えている。子どもが「人の死」に出会うことの意義に関して、都市部で72.6%農村部では88.9%の保護者が認めている。ここでも多数の保護者個々人は、いのちの教育に関心を示し「人の死」との出会いをおろそかにすまいとしているものと受けとめる。保護者の中には「死の現実を見て感じ取ってほしい」という、人生の死と生や社会の裏と表を生活の中で丸ごと体験させようとする健全な教育観を大切に思っている者もいる。すべてを丸

ごとと見ることが生きることだという考え方に裏づけられた頼もしい人生観である。

個々の保護者たちの多くは決して後ろ向きではなく、死の現実から学んでほしいと考えている。しかし、学校の授業をさいてまで死の場面に臨ませようとはしない傾向はある。

2 「人の死」の何に出会っているのか

保護者の調査や子どもたちの調査を通して、意外にも子どもたちが「死の場面」に立ち会っていることをつかんだ。問題は、子どもたちが出会っている死の中身が何かということに焦点が移る。

今日、葬儀は商業化しイベント化してしまった。その結果親たちの思いとは反対に、子どもたちが出会っているのは演出的な「死の儀式」であり、決して「死に逝く姿」ではなくなっている。したがって、今日子どもたちが死に出会っているか否かを論じる時に、ただ単に出会っているか否かを二分法で論じるだけでは不十分である。死の何に出会っているのかを明らかにしなければならない。つまり「死の儀式」や「死の情報」には出会っていても「死に逝く姿」には出会っていないというのが、今日の子どもたちの実態であろう。

昔の子どもたちは葬儀の場に臨んで「死に逝く姿」をも含めて感受していた。今の子どもたちも確かに、多くの子どもたちが葬儀の場に臨んではいるが、彼らは「死に逝く姿」には接していない。そこに「他者の死」のもつ意味上の違いがある。

また、親たちも子どもたちを立派に成長させようとして「他者の死」に臨ませようとしているが、イベント的な「死の儀式」と生活の中にある死の過程を看取ることとは別のものであることまでは見分けていない。

今日子どもたちに大切なことは、明治・大正期の子どもたちが体験したような死との出会い

から学ぶことである。今日若者に求められるものは、死の儀礼体験もさることながら、かつて明治・大正期の子どもたちが経験したような「死に逝く姿」を看取る体験である。

その体験こそが大切なのである。明治・大正期の子どもたちの体験と現在の子どもたちの実態とを比較対照してみると、そこには歴然とした違いがある。明治・大正期の子どもたちの体験が、今日では決定的に欠けている。そうした時代をわれわれは生きていることを自覚的にとらえておかなければならない。そして、今日の子どもたちに明治・大正期の子どもたちの体験の何がしかを取り戻したいものである。

第3章 「死との出会い」のもつ意味

調査や聞き取りの中で、大多数の親たち個人は善良で、子どもを立派に成長させようと願っている。ただ何をどうすればよいのか、その方向性を見失っているように思える。

教育理論や教育実践を根底で支える、先人が築いてきたなにげない普通の日常生活を、可能な限り取りもどす営みが大切なのではないかと思えてくる。

つまり子どもたちに、地域社会の生活の中で可能な限り、生も死も、苦も楽も丸ごと体験させることが大切である。一人の人間を丸ごと見せる、つまり生も死も共に包み隠すことなく、できることなら日常生活の中で子どもたちに体験させることが最も望まれることである。現にマーク・ジュリー/ダン・ジュリーの著書『おじいちゃん』は、痴呆になったおじいちゃんを最後まで見守り自然死させる過程で、人間の恥部や醜さ弱さもろさの全部をさらけ出して、いのちを考えさせようとする作品である。若さや美しさや強さに憧れ、あえてその反面を見まいとする今日の若者に対して語りかけている⁽⁸⁾。

聞き取り調査に見たように、もともと日本の

地域社会には、地域共同体の中での様々な体験を通して、子どもたちを健全に成長させる土壤がつつかわれていたように思える。その土壤の中で明治・大正期の子どもたちは一歩ずつ大人へと成長していった。

明治・大正期の子どもの姿に具現されているような「日本古来の教育」を、池田昭は民俗学的な視点で『民間教育論序説』⁽⁹⁾で論じている。

その中で、子どもがどのように育てられて成人に達するのか、その過程にある通過儀礼としての習俗・慣行・行事などをひとまとめにして、近代以前には「児やらひ」と呼んでいたことを紹介している。つまり「児やらひ」は、村落共同体（地域社会）の中で伝承されてきた子育ての実践であると説いている。子育てが、村落共同体の民間生活の中で継承され、それが児童教育論として成立したと述べている。

その理論と方法は、一定の秩序をもって構造化され体系化された近代学校教育における顕在的なカリキュラム（manifest curriculum）に対して、潜在的なカリキュラム（hidden curriculum）とすることができる。

やまとことば
和語としての「児やらひ」は「しつけ・しこみ」と同意語だとしている。「やらひ」は「やる」のことで、古くは「好ましくないものを追いたてる」場合に使われていたと述べている。それでは、なぜ人間の子育てにこのことばを使ったのかについては柳田國男の説にさかのぼって、その説を引用している。

柳田國男の説は、「動物の親離れ子離れを例にあげ、親が子離れをする行為を『やらひ』といい」「子どもを後から追いやり、おし出し、現実のものごと（社会）と対面させる行為」の持続が日本におけるかつての子育てであった。かつては子育てのことを「児やらひ」と言っていたというのである。「やらひ」という語義は「子どもを人なみにして自立させることであり」そのために「しつける」ということであった⁽¹⁰⁾。

こうした「児やらひ」の風土の中で通過儀礼を通して、一人前の人間に成熟していった姿を、明治・大正期の子どもたちの中に見るのである。つまり明治・大正期の子どもたちが育った時期は、まだ日本社会の中に「児やらひ」の文化が息吹いていたと受けとめることができる。当時の子どもたちは幼い頃から地域共同体のさまざまな行事や冠婚葬祭の中に身をおき、わけでも死者を弔う場面に臨み、葬式の間では花を持つなどの役割が与えられ大人の社会に追い出され現実に対面させられた。これは紛れもなく「児やらひ」である。やがて大人になると、焼き場でみごとに遺体を火葬する体験を通して1人前として認められていったのである。

ところが明治以来の学校教育は無駄なく、効率的合理的に子どもたちを思う方向へと引っ張る教育へと徐々に傾斜していった。言うまでもなくフォーマル化された教育の重視であった。しかし、ありがたいことには地域に帰れば調査にみるような「児やらひ」の伝統を継ぐインフォーマルな教育があり、それが暗黙のうちに学校教育を補完していた。この二つの教育は両々あいまって教育効果を発揮してきた。しかし、いまやそのバランスは崩れつつある。「前から引く教育」と「後から追いやり、おし出す教育」とのバランスのとれた教育を取りもどすために、地域の教育力が大切なのである。そのために日本古来の教育の復元が求められると考える。

「生と死」の教育を中核にした、家庭や地域の教育力の復元が重要である。教育課題の多い今日、「生と死」の教育を出発点にして、諸々の「存在の二極性」のバランスを取りもどす教育の営みが重要な実践課題であると思うのである。そのような今日だからこそ「死との出会い」の意味は大きいと思う。

現時点では問題提起の域にとどまったが、家庭や地域の教育力を復元する営みのために、そ

の手がかりの一助として、さらに高齢者の生きざまを引き続き聞き取ることを今後の課題としたい。

おわりに

もともと地域には、通過儀礼や何でもないような日々の体験がインフォーマルな教育力としてあった。それを節目に、子どもたちを大人へと成長させていった。それは、潜在的なカリキュラム（hidden curriculum）として古来地域に根づいていた。中でも子どもたちは「他者の死」に出会うという、潜在的なカリキュラムによって、確実に大人へ生まれ変わっていった。

今回の聞き取り調査によると明治・大正期の子どもたちは、紛れもなく子どもの頃から地域共同体のさまざまな行事や冠婚葬祭の場に身をおき、わけでも死者を弔う場面に臨んでいた。やがて大人になると、斎場でみごとに遺体を火葬する体験を通して1人前として認められていった。日常生活の延長線上に、身近な人の「死に逝く姿」を見ながら育った。

それを自らの生きざまに重ねて、即「いのちの教育」として取り込んでいった。

ところが、日本古来の民間伝承的な子育ての手法として、確立されていた「児やらひ」と呼ばれる子育ての理念が、時代と共に忘れ去られて行った。しかし、少なくとも明治・大正期の子どもたちが育った時期には地域に「児やらひ」という子育ての理念と、それにのった具体的な地域教育があった。

一方、現在の青少年の実態をアンケート調査によってつかむことを試みたが、その中で、今日の子どもたちの姿が十分ではないにしても見えてきた。それによると予想に反して、子どもたちが「他者の死」に出会っているという事実である。また、多くの親たちも子どもが「他者の死」に出会うことの教育的意義をわきまえて

いる。

しかし、問題は子どもたちが出会っているのは、多くの場合「死の儀式」や肉体としての死との出会いであり、ひとりの生活者としての歴史を背負った人の「死に逝く姿」との出会いではない。

親たちは、善意ではあっても、子どもたちの肥やしになる「死との出会い」は何かについて、そのイメージを必ずしも明確につかんではいない。いきおい商業主義に乗った「死のイベント」としての儀式に臨ませることに終わっている。

このような現状認識に立って、今後の子どもたちをどのように地域の中で導くのが大人の課題である。

【注】

(1) 修士論文

『幼少期における地域体験のもつ教育力 ―通過儀礼と子どもの人間形成―』(2004年度)

副論Ⅰ (調査結果報告書Ⅰ)

『他者の生と死との出会い』(高齢者聞き取り調査内容報告)

調査件数54件 (58人) (2004年3月現在)

(その後調査は継続中 2006年1月現在72件)

副論Ⅱ (調査結果報告書Ⅱ)

『他者の死との出会い』(小中学生・保護者アンケート調査結果報告)

(2) 『死と癒しの文化―死を看取る文化』新村 拓著 (仏教大学通信教育学部) (p4) 2003年

(3) 『人生のくくり方』―折り目・節目の社会学― 加藤秀俊著 NHKブックス737 1995年

『生と死の教育』樋口和彦・平山正実編 創元社 1985年

『死生の課題』藤本浄彦編 人文書院 1996年

『生き方上手』日野原重明著 ユーリーグ株式会社出版 2001年

『死の教育』R・C・ミラー著 鍋倉勲訳 ヨルダン社 1995年

『農村の婚礼と葬儀』池田斉編 農民教育協会 1954年

『生と死の現在』竹田純郎・森秀樹・伊坂青司編 ナカニシヤ出版 2002年

『死の瞬間』川口正吉訳 読売新聞社 1971年

『さよなら』を大切な人にいうんだ』 マーजीー・

ヒーガード作 清水恵美子訳 法蔵館 2001年

『いのちを教える』『仏教者からの提言』中村元著 法蔵館 1985年

『葬儀の歴史』芳賀登著 雄山閣出版 1991年

『暮らしの中の民俗学』③一生 新谷尚紀 湯川洋司 波平恵美子編 吉川弘文館 2003年

(4) 『“死生観”の種々相 ―トーク&ディスカッション―』(「編集」仏教大学総合研究所―四恩社) 「社会・文化問題としての“死生”」(p216～218) 1996年

(5) 『“死生観”の種々相 ―トーク&ディスカッション―』(「編集」仏教大学総合研究所―四恩社) 「社会・文化問題としての“死生”」(p247) 1996年

(6) 『人生のくくり方』(折り目・節目の社会学) 加藤秀俊著 (NHKブックス737)(p281要約) 1995年

(7) 「聞き取り調査」(F.T. 男36歳・東京在住・広島県出身 談)(2003・12・30-火-)

(8) 『おじいちゃん』マーク・ジュリー/ダン・ジュリー著 重兼裕子訳 (春秋社) 1990年

(9) 『民間教育論序説』Ⅱ「民間教育論」 「通過儀礼並びに年齢集団による民間の子育て」 池田 昭著 「中京女子大学紀要」(22号)(p22～33) 1988年

(10) 『民間教育論序説』(前出)(p22～33)

